

市民時報：2003年6～10月掲載

緑の街と緑の人びと

第一回

私はこれからドイツの環境保護にまつわるいろいろな事例を紹介してゆきます。その前に、まずは皆さまに現在私が住んでいるフライブルク市を紹介しましょう。

この街の見所は、なんといっても中世の佇まいを今も残す古い街並みです。その街並みの真ん中には、キリスト教世界で最も美しい塔を持つと呼ばれているゴシック様式の大聖堂があります。この大聖堂の建造には、何事にもせつかな日本人にとって気の遠くなるような年月がかけられています。工事開始が西暦一二〇〇年、そして完成が一五一三年、その間実に三〇〇年以上！ こういった世代を超えたスケールを理解して初めてキリスト教の、そして西洋の本質が見えてきます。



またフライブルク最大の産業は、成立が日本の室町時代という、これまた気の遠くなるような歴史を持つフライブルク大学。そう、ここはまさに「大学街」です。学生数は人口の割を越える二・三万人にも及び、大学病院や研究機関がひしめいています。学生街の雰囲気は、とにかく明るく、開放的で自由と若さに包まれているというこ

とに尽きるでしょう。

フライブルク市のもう一つの特徴は、市内に圧倒的な緑が存在することです。市内には実に一三〇ヶ所を超える公園が整備されています。私は日本に帰るたび市内の緑の少なさに寂しさを覚えます。そういった感覚になるほど、フライブルクの緑は多く、また、この緑は増え続け、将来も減る心配がありません。それは国の自然保護法と市の条例が、自分の庭の木であろうとも勝手に切ることを許さないからです。



緑がそこにあれば鳥が、昆虫が集まります。また同時に市民にも新鮮な空気と安らぎを提供します。だからこそ緑は公共のものだ、という認識がヨーロッパにはあります。夏季の間（三月から九月）は枝を払うことすら許されません。幹がある一定の太さになると、家の改築の際など、どうしても切らなければならない場合には、市の環境課に伺いを出し、代替の木を自分の敷地に植えなければ切り倒すことが許されていません。こういった私有地にも公共性があるという考えは、「おらの土地」という感覚の日本ではまだまだ発達していないですね。

このような感じでドイツの環境について紹介してゆきます。環境とはドイツ語でウムベルトといい「身の回りの世界」を表します。次回からのドイツの身の回りの世界にご期待ください。

第二回

さて二回目のフライブルク通信です。フライブルク市は近年、日本では特別な存在になりました。なぜならこの街は環境先進国と呼ばれるドイツの中でも、とくに「環境首都」と呼ばれているからです。現に日本で環境保護に関係する人びとの間では、「フライブルク詣」とまで呼ばれているように一説では年間三千人を超える視察者がこの街にやってきます（←90年代の話）。

その視察者の目印は、学生街の雰囲気からいかにも浮いている紺やグレーの背広姿！ 彼らの多くは自腹を痛めないで（つまり公費で）観光？ しているようです。そして残念ながら大多数の視察者は、この街にせいぜい一日か二日しか滞在しません。五日間ヨーロッパ各都市巡りといった強行スケジュールで視察が行われています・・・これも日本人の悲しい性なのでしょうか？

話は変わって今回からはこの街の公園、そして緑の施設のお話です。前回にも記したようにフライブルク市には大小様々な公園が一三〇箇所以上整備されています。この街の総人口は約二〇万人ですから一、五〇〇人に一つの公園が整備されている計算です。フライブルク市がドイツの「子供にやさしい自治体コンクール」で大賞に選ばれた理由が分かります。

また緑の施設は公園だけではありません。フライブルク市を囲む黒い森の中には、数え切れないほどの遊歩道が整備されています。市民はいつでもハイキングや散策を楽しむことができ、冬はクロスカントリーも可能です。



また市の中心を流れるドライザム川の両岸には遊歩道と自転車道が整備されています（歩行者と自転車が分けられているため、どちらの利用者も快適に通行できます）。そして川の両岸には木が生い茂り、河原の斜面を利用した休息地も設けられています。ここはフライブルクで最も愛されている散歩と昼寝の場所。夏になると学生は足を水に浸し暑さをしのぎながら本を読み、子供達は水辺で遊び、恋人達は芝生の上で・・・。

ジョギング、サイクリング、そして最近ではインラインスケートをする人も多く、体操や太極拳、はたまたヨガに興じている人の姿まで見受けられます。キャンプ用の焼肉グリルを持ち込んで本場ドイツのグリル・ソーセージに舌鼓を打つ人びとも多いのです。

日本人である私は、この楽園のような風景と開放的な雰囲気に感心し、またここが市の真ん中であることにいつも驚かされています。

第三回

前回からフライブルクの中央を流れるドライザム川沿いの楽園についてレポートしています。

ところでドイツ人は、散歩好きで有名です。よく連想されるように哲学者ばかりでなく、散歩は国民的な道楽となっています。川のせせらぎを聞きながら（車から離れて！）あてもなくぶらぶら歩くことは、国民性を超えて誰もが楽しめる究極の道楽ではないでしょうか。

ひるがえって日本の河川の両岸の多くは自動車が入る道路になっています。また河原の整備も市民の良心（町内会や守る会といった形の）に支えられているのが現状です。川を愛する気持ちや、川と生活を共にする楽しみは多くの日本人が知るところです。その気持ちが行政に反映されなくては、「市民のための河川」とはならず、ただただ水の流れる場所となってしまいます。



ドイツ人の好むドイツ語に「プフレーゲ」という言葉があります。これは日本語で「手入れ」、「手当て」と訳されます。病人の看病や子育て、物をいたわり、修理し、維持させるという意味の「プフレーゲ」が環境と福祉の時代といわれる今、重要ではないでしょうか。

フライブルク市内には豪華な公共の建物（箱もの）はあまり存在しません。しかし例えばフライブルク市の庭園課（公園や街路樹、川沿いなどを管理、整備している部署）には二〇〇名を超える

「手入れ」のエキスパートを市の職員として受け入れています。彼らは、春に花を植え、夏に雑草を取り、芝を刈り、秋に落ち葉を集め、冬には枝をはらっているのです。

日本の同規模の自治体には確かに多くの立派な箱ものが存在します。しかし、緑の施設を手入れする人員や、独立した公園を管理する部署は、ほとんど存在しないのが実情です。人の手が入り、自然と調和した形の遊歩道や自転車道。そして水辺の空間。河原に手が入れば、週末はデパートで、連休はディズニーランドで、といった余暇の過ごし方が変わるのかもしれない。

またドイツのある研究所は「高規格の自転車道に投資する額を自転車道や歩道に投資すれば、二倍以上の雇用が発生する」と試算しています。日本では自転車道や歩道のために国が補助金を出すことなど稀なようです。地元で雇用が発生し、地元でお金が落とされる仕組みがこれからの自治体の生命線になることでしょう。

先日も友人の家族と一緒に河原を散歩してきました。今年のフライブルクの六月は一八〇年ぶりの猛暑で連日三五度を越えています。子供達はすぐに川に入り、小石を投げたり、水を掛け合ったりしています。途中で夕立がきましたが、濡れることを気にする人はいませんでした。夕立が過ぎると熱気が和らぎ、小鳥達が一段と高い声で鳴いていました。

第四回

さて今回は公園のお話。最初は市内の中心部にあるゼーパークについてのレポートです。フライブルク市の大型公園には「全ての年代の人びとが楽しめるように」という思想が一貫して計画に反映されています。このゼーパークはもともと、フライブルク市の近くを通るアウトバーンのための砂利採取場でした。砂利を採取した後の巨大な穴に自然に水が溜まり、人口湖が作られたのです。ドイツ語で「ゼー」とは湖を表します。その湖を中心に各種のテーマを持つ公園や施設が作られています。

話は変わりますが、ドイツの小中高校には日本でいう「部活」なるものは存在しません。従ってサッカー場などの大きなグラウンドは学校にはありません。スポーツから吹奏楽に至るまでの活動は、各地域が主体となりジュニアからシニアまで一つのクラブ（NPO）として運営されているのです。そのためスポーツのための施設は多くの場合、大型公園に密着する形で作られています。ゼーパークにもサッカーやハンドボール、テニスなどのグラウンドや陸上競技場が整備されています。

また子供の遊び場（子供の年齢別に遊べるように数ブロックに分かれています）、日光浴をする芝生、ビアガーデン、また人が入れない形で木が植えられた鳥類の保護区などが湖を囲む形で点在しています。その点を遊歩道と自転車道が結んでいるのです。こういった大型公園は市内に四つあり、誰でも休日をお金を使うことなく満喫することができます。



夏場はサマータイムを利用して、仕事を終えた市民が日没の十時近くまで日光浴を楽しみ、中には湖で泳ぐ人もいます。

日本人の私に強烈だったのは、人目を気にしないドイツ人が丸裸で日光浴していることです（もちろん一部の人びとですが・・・）。美女もいれば、お年寄りからおっさんに至るまで、地理的には市内のど真ん中で、本来禁止されているはずのオールヌードの姿には、目のやり場に困ることもありました。

私の両親がフライブルクを訪れたときのことでした。市内観光の後、私達が湖そばの公園で休憩していると、会社帰りの男性がやってきました。彼は何の躊躇もなく全てを脱ぎ捨て、湖で泳ぎ始めました。そこに十歳位の子供がやってきて、湖にいるカモにパンくずを与えていました。するとその男性が子供のところまで大急ぎでやってきて、パンを投げ入れるのを止めるように注意を始めたのです。カモはパンがなくても餓死することではなく、湖がそうした行為で富栄養化し、水質が悪化するからです。

ただパンツをはいてから注意した方が説得力があるのに、というのが私と両親の一致した意見でした。

第五回

今回もフライブルク市の公園について。日本のように学校にグラウンドがないドイツでは、放課後に子供が集まって遊ぶ場所といえば近所の児童公園になります。

これまでに私は、フライブルクには一三〇ヶ所を超える児童公園があると書いてきました。先週、この市民時報のレポートのためにフライブルク市の庭園課を再調査したところ、正確には一四二ヶ所もの公園があるそうです。そしてこれからも公園の数は増え続けます。なぜならフライブルクは毎年五ヶ所を目標に児童公園を新設しているからです（←経済状況が悪くなった今はそれほどの余裕がない）。

ここで自然な疑問が浮かび上がります。なぜドイツの自治体はそこら中に、そしてこうも簡単に公園を作ることができるのか、という疑問です。これは近代化の歴史とも無関係ではありません。話がそれますが少し説明を加えます。

日本は明治に入り突然、短期間で近代化を成し遂げました。このとき明治の新政府は、国の土地で山まで含めて土地という土地をほとんど民間に払い下げました。また当時の人びとには今でいう「国」や「公共」という考えがあまり発達しておらず、公共の土地を売り払うことにもブレーキがかからなかったようです。新政府も旧幕府と同様「お上」であり、当時の普通の人びとは政府に意見できる時代ではなかったのでしょうか。

従って現在、日本のほとんどの平地は民間のもので、この状況では国や自治体は公共の空間（道路や公園など）を自由に作ることはできません。今に至っても都市計画を行う際、この事実は大きな障害になっています。

しかし、ドイツでは現在でもなお膨大な土地を

州や自治体が所有しています。それは公共の空間を比較的自由に、そして安価に形作ることを可能とします。また第二次世界大戦後に戦災都市の復興や再開発を行うにあたって、①大戦前の状態への復元、②交通の発展と都市機能の分離、再配置という二大原則が厳しく適用されたのも日本と違うところでしょう。



しかし日本の自治体がある程度土地を持っていたとしても、本当にフライブルク市のように多くの公園を作ったのでしょうか？ ドイツは日本より過酷な近代化の波にもまれたにもかかわらず、どこの都市でも市内に緑を残しています。

それはドイツが自然を過去に一度、徹底的に破壊してしまったからだ、と私は考えています。ドイツでは日本よりもずいぶん早くから金属工業が発展しました。燃料として森という森の木がなぎ倒されたのです。一七世紀末にはドイツ人の心ともいえる森が最も少なくなっています。その後もヨーロッパでは自然に対する攻撃が続きます。一八世紀の産業革命。ロンドンに代表されるような「灰色の街」がドイツにも広がり、汚染という脅威が拡大しました。自然を破壊してから初めて気付く自然の有難さ。ここがドイツの環境保護の原点だといえます。破壊から再生へ。こういった歴史があるからこそドイツの街並みには緑が置かれるようになったのではないのでしょうか。

第六回

詩人として名の高いドイツの文豪ゲーテが、もともと弁護士だったのはご存知でしょうか？この時代、彼のような天才は、どの分野にも通じていました。とくに彼は地質や鉱物学、植物学から解剖学といった自然科学の研究に熱心でした。そして彼は独自の自然観察法を確立したのです。その後のゲーテは多くの詩の中で森のやすらぎについて書いています。

「古池や・・・」でわび・さびを感じ、やすらぐことができるのが日本人なら、森の緑でやすらぐのがドイツ人です。こういったドイツ人の自然観と森を愛する気持ちは、後にワンダーホーゲル運動へと展開したり、政治組織として「緑の党」を結成させる動きへと繋がっていったのでしよう。

さて話を公園に戻します。フライブルク市の庭園課の話です。児童公園といえば、ブランコや滑り台、ジャングルジムなどの遊戯器具が置かれ、砂場がある場所を想像しませんか？フライブルクでも公園といえばそのような場所ばかりでした。しかし一九九五年を境に、フライブルクは公園に対する考えを改めています。毎年五つの公園を自然に近く、子供にやさしい形に改良し、新たに五つの公園を自然配慮型、子供参加型で新設しているのです（←現在は財政悪化のためそれほど積極的には行われていない）。

それでは、自然配慮型の公園とは一体どんなものなのでしょうか？そのためにまず考えなければならないのが、現在の子供達の生態です。彼らは三〇年、四〇年前の子供達とは全く異なった環境で生活しています。増え続ける車と少子化の波。そして自由に進入できる土地は減り続け、その土地を勝手にいじることも許されなくなりま

した。



近自然工法による公園のスケッチ（提供：建築家、吉田敬氏

<http://ameblo.jp/gruenwal/>

「外で自由に自然をいじり、創造し、破壊する」といった行為を十分に行っていない子供達に対して、「消費してばかりで、すぐに飽き飽きし、後片付けをしない」と非難するのは酷な話だ、というのが新しい市の方針になったのです。これはフライブルクにおいて一九九三年に行った社会学調査の結果を受けてのことです。この調査では、子供が自由に、監視を受けない状態で遊べるのは、一日の内でわずか五%以下（つまり四〇分程度）しかない、というショッキングな結果も公表されています。従って庭園課では、児童公園をできる限り子供の視点で、子供にとって本当の遊び場として整備してゆくよう心がけています。

自然に近く、子供にやさしい公園のキーワードは「火、水、木、土」の四つです。次回からは近自然型の公園について紹介しましょう。

ところで近自然工法による公園を作るようになってから大きく変わった事実があります。公園で親も一緒に遊ぶようになったことです。公園のスケッチを眺めて見てください。その場所で遊びたくはなりませんか？

第七回

自然と子供に配慮した公園の話です。先週も書いたようにキーワードは「火、水、木、土」。これはそれぞれ自然の元素を使うことを意味します。完成された遊戯器具（例えば滑り台やジャングルジム）は、一度遊べば飽きてしまいます。そこでこうした人為的な玩具をできる限り排除し、公園の土地にまずは築山をつくります。そこに丸太や大きな石があればよじ登るのも楽しいでしょう。雑草・野草を植えた草むらがあり、その辺の土は穴を掘っても誰にも文句を言われません。砂場や築山には飲料水としても利用できる水汲みポンプがあり、ドロンコ遊びも可能です。

子供にやさしい公園とは、高価なおもちゃの設置がテーマではなく、子供の服がいか「どろどろ」になるのか工夫された場所です。遊戯器具を設置する代わりに、その予算で小石や枝、材木などの「遊びの素」を公園に補充します。焚き火をしてパンやソーセージを焼くイベントも開くようになりました。そんな魅力的な「空き地」あるいは「秘密基地」型の公園が自然と子供に配慮された近自然工法の児童公園です。



さて私がドイツでいつも感心していることがあります。ドイツ人は、何かを始めるときは理念が確立するまでいくらでも討論します。日本人は、「まあ建前だからこの辺で」と落とし所をすぐに考えてしまいがちですが、頑固なドイツ人は納得で

きるまで、机を叩き、つばを飛ばしながら話し合う傾向が強いといえます。また「皆が同じ考えを持っているか、少なくとも同じような考えに納得できるはずだ」というのが前提の日本社会と、「一人一人が異なる考えを持っているのだからぶつかるのが普通だ」という前提のドイツ社会では話し合いの仕方も違いますし、異に対しても寛容さがあります。

こういった近自然工法による公園のようなプロジェクトは、理念が確立しないと実現することは難しく、また単発で終わってしまいます。例を挙げましょう。近自然公園を作りはじめた当初は、「服が汚れる」「危険だ」といった親の苦情が庭園課にも実際に多く寄せられたそうです。この苦情にひるむことなく、乗り越えられたのは、理念が確立していたからに他なりません。一部の親の苦情よりも、民主主義で議論された理念のほうが強いというわけです。

ところで私には一ついやな趣味があります。初対面の人に何をしているのか聞かれると、必ず「主夫」と答え、反応を見るのです。これをドイツ人に試すとあまり面白くありません。ほとんどの人が「そう」という反応しか見せないからです。

しかし日本人の環境視察の方などにこれを試すと、反応の仕方がいろいろ見られ楽しめます。最近の傾向は「大変ですねー」というのが男性。「何を言っているのかしら。この人で本当に大丈夫？」というのが女性の反応になっています。異に対しての対応も、日本とドイツとではずいぶん違うようですね（←現在ではそんなに違和感がなくなりました。時代は変わるものですね）。

さてフライブルク市の方針は、子供にやさしいまちづくりです。将来の財産である子供への配慮。今回は公園以外での配慮について紹介します。

第八回

今回はフライブルク市が力を入れている「子供の遊べる道路」を見てみましょう。一九九三年にフライブルクの社会学者が「市内の子供の活動空間」という調査を行ったことは以前にも触れました。それ以来この調査書は本となり、子供にやさしいまちづくりの手引書としてドイツ全土で参考にされているバイブルとなりました。

この調査書には、子供にとって外で活動するときに最も重要な空間とは、①家の庭や車庫、②家の前の道路、③近所の公園という順序であることが記されています。

しかし自動車交通が飛躍的に増加している現在、②の道路で遊ぶことが大変困難になっています。これを改善し、さらに騒音と事故のない快適な生活空間を作ろうというフライブルク市の試みが、二〇〇二年に一応の完成をみえています。現在フライブルク市内の住宅地のほとんど全ての道路は、三〇キロゾーンとなり、厳しい時速制限を受けています。また一二〇ヶ所を超える住宅地の通りが「遊びの道路」になりました。



遊びの道路とは、車は歩く速度で、最徐行で子供の遊びを妨げないように走らなければならない道路のことです。ただし、遊びが優先ではなく、車や歩行者、自転車、遊ぶ子供と、すべての道路利用者がお互いに譲り合って利用する空間だと

道交法で定義されています。こういった「遊びの道路」の入り口には大きな看板で表示がしてあり、子供のための道路ということが一目で分かるようにしてあります。

もし皆さんの周りに子供がいればこのような道路が欲しくないか一度訪ねてみてください。私の子供の頃は近所の道路で野球をすることができました。多くの車の運転手は温かく見守ってくれていたのです（もちろん中にはクラクションを鳴らす大人もいましたが・・・）。

チョークや石を使って道に落書きしたり、陣地取りをしたり、また道路わきにたまっていた細かい砂のようなものを集めたり（アスファルト粉塵ですね。体には悪そうです）、自転車鬼ごっこをしたりと道路はみんなの遊び場でした。

しかし現在、道路で子供達が遊べる環境にあるのでしょうか？ また親が道路で遊ぶことを許しているのでしょうか？ もちろんドイツでも、通常の道路で子供達が遊ぶことに理解がない人達が大勢います。特に「自分もかつては子供だった」との認識が欠けている働き盛りの中年世代がいけないようです。

市内を車で五キロ移動する必要があるとします。もし時速五〇キロで飛ばしたなら六分で目的地に着きます。それよりも二〇キロ時速を緩めて、三〇キロのスピードで走ってもたった一〇分しかかかりません。その差は四分。この四分を私達は本当に有意義に使っているのでしょうか？

「身の回りの世界を守る」という意味の環境保護とは、どうやら私達の生活リズムをスローにすることから始めなければならないようです。

第九回

「目的地までいかに速く辿り着くか」ということに近代の交通は重点を置いてきました。その結果、渋滞、事故、そして環境破壊と本来移動する際に最も大切だったはずの「快適さ」を忘れてしまったようです。ドイツも自動車王国ですから、平均的な男性が渋滞の中で過ごす時間（年間六七時間）の方が、セックスをする時間（年間四〇時間）よりも長くなっているそうです。この現実が私達の生活の質やレベルを物語っているようです。

今回はフライブルク市の公共交通機関について。フライブルクには路面電車とバスの交通網が、文字通り網の目のように広がっています。従って市内のどこでも自動車や自転車がなくとも辿り着くことができます。しかし「辿り着くことができる」と、「辿り着くことができて当たり前」とでは全く意味が異なります。フライブルク市の公共交通の場合は後者で、「快適に」辿り着くことができるのです。

秘密は時刻表の間隔の細かさ。日中の路面電車や主要なバスに至っては、二〇万人という小さな都市であるにもかかわらず、時刻表をほとんど見ることなく使うことが可能です。こうでなければ利用者は車を移動手段として優先させてしまうのです。

また料金システムも画期的です。通常的一次券は高額で、一日乗り放題の一日券や回数券もあまり魅力的ではありません。しかしフライブルクには「レギオカルテ」という一定地域（フライブルク市と周りの市町村を合わせた二二〇〇k m²のエリアで使い放題！）であるならば、一ヶ月間乗り放題という定期券があるのです。私の娘も通学にはバスと市電車を使っていて、その定期券を毎

月買っています。値段はおよそ四五〇〇円（学割の場合。一般は六〇〇〇円）で、自由にフライブルク地域を移動できます。



またナイト・バスという週末だけの深夜バスも運営しているため、うら若き娘がディスコに行っても親は安心して寝ていられます（ヨーロッパ人はとにかくディスコ好きで、曜日によっては年齢層を変えたり、曲を変えたりしているので、若者から中年世代まで踊りを楽しむことができます）。

近距離交通機関は、フライブルク市のように成功していても採算が取れていません。というよりは、採算を取ることを目的とした運賃設定がなされていませんし、利用者の利便を考えると、採算優先では魅力的にはならないからです。

しかしフライブルク市が一九八四年に環境定期券制度を導入し、近距離交通機関に力を入れてから利用者数は三倍に増え、年間延べ六、五〇〇万人が利用しています。自動車の開発援助や道路にだけ税金を使うのではなく、子供もお年寄りも、弱者も強者も利用できるものに税金を投入する。ここが民主主義の重要なポイントだと思います。

また自動車をバスや電車に乗り換えたとき、環境負荷は少なくとも一〇分の一に削減されることも覚えておくと良いでしょう。環境破壊の「つけ」は、おそらく子供達が支払う税金で賄われるのでしょから。

第一〇回

今回はドイツ人の散歩好きについて。ドイツ人に「ご趣味は？」と尋ねると、ほとんどの人が「散歩」と答えます。「散歩」とはどこまでが趣味で、どこまでが単なる移動なのかははっきりしませんが、とにかく安上がり！そして心と体の両方に健全な趣味といえそうです。また散歩の定義も日本とは違います。三〇分ほど歩くことを散歩とは呼びません。二時間前後、本格的に歩くことでようやく散歩と呼ばれるようです。

したがってドイツという国には、津々浦々に散歩道が網羅、整備されています。閑静な住宅街から里山、畑から墓地、川沿いに至るまで、散歩をどこでも満喫することができるのです。

私の住んでいるフライブルク市は、ドイツの中でもとりわけ散歩に関して不自由することがない高環境の都市です。すでにこのコラムでお話したドライザム川や数多くの公園、黒い森など、散歩や散策をする場所がいたるところにあります。

今回はそんなフライブルク市ではじまった新たな試みについてのお話です。先週にもお話ししましたが、フライブルク市の公共交通は市電とバスが主力で、その路線網と時刻表が密なことで有名です。その近距離交通網を営んでいるフライブルク交通社は、「近距離交通網の未来を提示した」と豪語する集中管理システムを導入しました。全てのバスと路面電車に小型コンピューターを搭載し、自車の位置を知らせる電波を二〇秒間隔で中央システムへ発信するようになっているのです。このシステムの導入によってバスや市電の運行の際、信号待ちを減らすように信号機と連携させたり、バスや市電が停留所まであと何分で到着するかを、電光掲示板で正確に知らせたりできるようになっています。

さて、本題の「散歩」と市電の関係です。バスや市電の各停留所は、徒歩で五分ぐらいの間隔にあります。これまで私は、バスや路面電車の待ち時間を利用して、時刻表を見て、時計を睨みながら一区間歩くことが好きでした。なぜ、こんな馬鹿げたことが好きなのかと聞かれても答えようがありません。こうした無理やりに作り出した自発的強制散歩をすると、すごく健康に良いことをしているように感じたからかもしれませんね。

しかし歩き出してはみたものの、途中でバスに追い越され、結局次のバス停で余計に待たなければならなかった、という痛恨の経験も数多くあります。しかしこれからはそんな苦い経験を繰り返すこともありません。到着時刻が正確に分かる集中管理システムの恩恵で、電光掲示板を見て「よし、一区間歩こう」と即決できるようになりました。



しかしバスに追い越されないように緊張した五分間の「早歩き散歩？」がなくなることにも、なぜか少し寂しさを感じています。精度や利便性は、時に日常のスリルを奪ってしまうのです。

第一一回

今回は森と幼稚園のお話。私は子供の頃、山の中に建てられた幼稚園に通っていましたから、幼稚園児が森で遊ぶことの楽しみを良く知っています。幼稚園で記憶に残っているのは、座布団をビニールの米袋でくるんだ「座布団そり」で冬の山々を滑り降りたことです。

八〇年代までのドイツの幼稚園は、とりわけ森で遊ぶことを推奨しなかったようです。当時の子供達は自由に山に出かけていたようですから、幼稚園でわざわざ森に行く機会を提供する必要がなかったのかもしれませんが。しかし現在、ほとんどのフライブルク市にある幼稚園では、公立、私立を問わず、毎週一回「森の日」というのを設けています。これは夏ばかりでなく冬でも、そして晴れでも雨でも雪でも森へ行く日となっています。

実際に幼稚園児が森で何をしているのかについてはあまりよく分かりません。私は付き添って森に入ったことがないので。しかし大方の予想はつきます。なぜなら私達家族の住んでいるアパートは森の入り口にあり、ほとんど毎朝のように二〇人ばかりの幼稚園児が二人の保育者とともに森に入っていく、昼前には「ドロドロ」で「ぐちょぐちょ」の塊が森から出てくるからです。

朝には元気で歌などを大声で歌っていた子供達も、昼にはぐったりして山から降りてくるのが仕事場から見えます。雨の日には「なぜそこまでやるのか」と思われるほどドロだらけで降りてきます（←もちろん、全身合羽に身を包んでいます）。

一度私の家の窓から幼稚園の先生に「おや、まあ、どろどろですね」と声をかけたことがあります。するとその先生は、「私達は大地の子供ですから」と笑って答えられました。



私の息子も今年の秋から幼稚園に入りますから、「主夫」としては洗濯物や合羽の用意、長靴の替えなど大変そうです。しかし週一回、山で自然と一緒に力いっぱい活動すると、子供の内面の攻撃的な傾向が発散されるそうです。子供にとってスポーツが非常に重要な理由もここら辺にあるのではないのでしょうか。

通常の幼稚園は週一回森に出かけるのですが、フライブルク市にはいくつかの「森を本拠地」とする幼稚園が存在します。これはデンマークを発祥とするアイデアで、ドイツでも九〇年代から急速に増えています。こうした「森の幼稚園」と呼ばれる幼稚園には校舎なるものは存在せず、森の入り口の集合場所にコンテナが置いてあるだけ。大きなリュック（この中にはパンなどのおやつと水筒、着替えがはいっています）を背負った子供達が、時間までにコンテナ前に集まり、二人の保育士に連れられて森の中に入ってゆくのです。

子供達は玩具の持込を禁止されていますから、最初のうちは何をしてよいのか戸惑う子もいるそうです。しかし一度創造力を駆使することを覚えた子供達は、毎日自然の中で自然の素材を使って飽きることのない遊びを創造する「大発明家」になるそうです。

第一二回

最近ドイツへの視察者の中に日本の教育関係者が多くなっています。それは日本の義務教育で「ゆとり教育」がはじまり、その中に環境保護や社会福祉、健康、情報技術、国際感覚といったテーマを扱うように指導されているからです。そこでドイツの環境教育を手本に、という視察団が増加しました。

ということで「ゆとり教育」について。大学を出てそのまま教職につき、人生をエスカレーター式に上って来たサラリーマン先生が、子供達に「ゆとり」を教えることができるのか、という疑問です。海外経験、あるいは日本で海外に関係したことの無い人が国際感覚を教えられないように、自然や環境保護に特に興味がなく、何も実行していない人に環境保護は教えられません。

大手の調査機関が、ある東北地方の小学生に「環境とは何か？」というアンケートをしたところ、「ゴミ拾い」という答えが一番多かったそうです。その地方ではゆとり教育の時間の多くを、公園などのゴミ拾いに使っていたからです。こういった笑えない話が、皆さんの身近にもありませんか？

それゆえ「ドイツの環境教育を視察する」というアイデアなのでしょうが、ゆとり教育を実践したい教育関係者が、三泊四日でヨーロッパに視察に来ること自体「ゆとり」がありません。またドイツの学校では全般的に環境教育が施されていますが、それは日頃の授業の素材やテーマが環境に身近なものであって、そのための特別な「ゆとりの授業」はありません。ゆとり教育をドイツで実施すると想定すれば（そんな無謀なことはやらないでしょうが）、ドイツ人は喜んで森に出かけることになるでしょう。そこで視察団の人びとは

わざわざドイツに着てまで、がっかりして帰ることになります。

このレポートのシリーズのタイトルは「緑の街と緑の人びと」です。これは子供のうちから年間数十時間の環境教育があったから達成されたわけではありません。街の歴史や成り立ち、あるいは人の意識の変革がそうさせてきたのです。フライブルクも大変ユニークな歴史を持っています。それを今回から少し紹介してゆきましょう。



フライブルク市も例外ではなく戦後の高度成長期の西ドイツでは、経済成長優先で社会が動いていました。例えば右肩上がりの当時のエネルギー消費予想は大変なもので、ドイツ全土で百数十箇所の原子力発電所が必要というものでした。そして当然、フライブルク近隣にも原発建設が計画されました。そのとき、六八年世代、いわゆる長髪にジーンズ、そして「ラブ・アンド・ピース」という強力なアクセントがドイツの歴史に登場します。この強力なアクセントは、日本のように時代の流れの中に埋もれて消え去っていません。現在でもあらゆる分野で活躍しているこの世代について知らなければ現在のドイツの政治、経済、そして環境保護は語れません。今回は原発反対などの学生運動についてレポートします。

第一三回

今から三〇年ほど前のことです。フライブルク市から約二〇キロ離れたライン川沿いの小さな農村、「ヴィール村」を舞台にしたお話です。

財政的に苦しんでいたこの農村に原発建設の話が持ち上がり、補助金をちらつかせながらの力押しの計画が進められました。最初は近隣の農家が反対運動に動きはじめました。「原発は本当に農作物に危害を加えないのか？」という疑問が出发点です。しかし彼らは原発の安全性に関する専門的な意見を持ち合わせていません。役人や電力会社が言うように原発は本当に安全なのか？

トラクターを持ち合っただけでは意味がないことに気がつきはじめた彼らは、フライブルク大学の門を叩くことになりました。



当時は学生運動が盛んな時勢です。大学の専門家が、ヴィール村近隣の農家の人びとに原発に関するレクチャーを行う動きは、すぐに学生にも飛び火しました。長髪、パンタロン姿の学生と農家の交流が始まります。一九七五年には建設予定地での座り込みデモが行われ、機動隊による排除活動も激しさを増してゆきます。こういった強硬手段をしのげたのは、学生の若さが農民の頑固さと上手く融合した成果でしょう。それまで保守党支持であったこの地方の農民は、何度も州都へ陳情

を行い、行う度に保守政党への不信感を募らせてゆきました。中でも印象的だったのが、当時の州知事が行った停電事件です。フライブルク周辺の地域一帯が強制的に一斉停電させられ、原発に逆らうものには電気を与えないという脅しで行われたのです。(←もちろん原因不明の事故という説明でした)

このときフライブルク市で芽生えたのは、デモや座り込みなどの反対行動ばかりではありません。法的手段で原発の安全性を問うことと平行し、これまでのエネルギー消費行動へ疑問を投げかけ、省エネ運動がはじまります。さらにこの省エネ運動が、最終的には自然保護・環境保護運動へと加速してゆきます。フライブルク市には多くの環境保護団体の本部や、環境に関する研究所、調査機関の本部が置かれるようになりました。

一度環境保護に目覚めた市民は選挙行動でもその力を余すことなく発揮します。フライブルク市で立候補する政治家は、第一に環境保護政策を訴えねばなりません。それ以外に当選の道はなくなりました。これは市長だけでなく、市議会議員も、またフライブルク地方から選出される州や連邦の議員も同様です。昨年行われた総選挙で環境保護をうたう緑の党は、連邦全体で八・五%の支持を得ました。しかしフライブルク市においては、二八%の支持を集めています。今では市長も緑の党の政治家です。このような歴史的な背景により、現在の「緑の街」が存在するのです。

結局、チェルノブイリの原発事故でドイツの原発推進政策にはブレーキがかけられます。三〇年経ったヴィール村の原発建設予定地は今では自然保護区となり、森のまま残され、「俺たちが、あかんでゆうた（現地の強烈な方言で書かれています）」という石碑が静かに横たわっています。

第一四回

今回はゴミのお話。最近、ドイツから岐阜県高山市の実家に帰ると必ず困ることがあります。どこに何を捨ててよいのか分からないのです。三〇を超えた大人がゴミを方手に母を探し回るといのは、ばつの悪い思いがするものです。

また日本の新聞を見ると、ゴミの不法投棄の記事が頻繁に目につきます。中でも都会で一人暮らしをしている若者が、引越しの際にゴミをどこに捨てればよいのか分からず、軽トラックで畑や山などにまとめて捨ててしまうというタイプの事件も見られます。こういった事件はもちろん法を犯した者が悪いのですが、実際のところ私は同情しています。これは日本のゴミにまつわる不良なシステムが原因だと思うからです。

一九九七年から日本では容器包装リサイクル法(略:容リ法)が段階的に施行されてきました。それに伴い、全国各地の自治体がまさに「いろいろ」なやり方で資源ごみを回収しています。自治体によれば二〇品目以上の資源ごみを分別しているところから、未だに多くの分別がうまく実施できていないところまで。それこそ複雑怪奇な「分別」が、ゴミ削減やリサイクルの効果についての議論なしで行われています。



これは、容リ法が拡大生産者責任をうたわなかったことが原因です。ドイツでは当たり前の原則である拡大生産者責任、つまり「ゴミとなるもの

を製造・提供した者がリサイクルに関する全責任を負う」という原則さえ成し遂げられていれば、前述の三面記事での不法投棄事件など発生せず、私が帰国する度にゴミを片手に悩むこともなかったはずなのです。

日本の容リ法は、いかにも日本らしく三者痛み分けの原理で作られました。もともと当時の厚生省は拡大生産者責任を入れたかったのですが、いつものようにある政党とある省によって一部企業の不利にならないよう市民と地方自治体の負担にと書き換えられました。そこでは分別は消費者が、収集は自治体が、そしてリサイクルは企業が行うことになっています。

この法律によると企業には「リサイクル可能に選別されたものをリサイクルする」責任だけが生じるので、それほど金銭的な負担は生じません。また小さな企業はこの義務すら免除されています。さらに全ての種類の包装容器をどこまで分別するかは各自治体が決めるので、資源ゴミである大量の包装容器が一般ゴミとして取り扱われている自治体もあります。

さて、企業の猛反対を押し切り拡大生産者責任を明確にしたドイツでは、容リ法の施行後五年で、一般ゴミの容量が四〇%減少しました。私も、ビンと紙以外の包装容器であれば何でも一緒に、企業側から提供される黄色のゴミ袋に投げ込んでいます(写真)。缶も、ペットも、プラも、テトラパックも一緒に。分別はほとんど機械化された清潔な工場で、雇用を生み出しながら行われています。

皆さん日本の場合、誰が痛み分けの敗者となったのか想像できますか？

第一五回

包装リサイクルの続きです。ドイツでは排出者責任の容り法が世界に先駆けて施行されました。もちろん全ての企業が、ドイツ全国の家庭から自社製品の包装を個別に回収して、リサイクルすることは不可能です。そこでドイツ中の企業が出資し、デュアル・システム・ドイツ社（略して DSD 社）というリサイクル会社を設立しました。ドイツで活動する企業は、この DSD 社に販売する包装容器のリサイクルを委託するのです。

手順を説明します。まず企業が自社製品の包装容器（素材と大きさ、重さ、そして出荷数）を DSD 社に申請します。それに対して DSD 社は、その包装容器の収集、分別、リサイクルにどれだけ費用がかかるのかを算出し、グリーン・ドット（写真）と呼ばれるマーク使用のライセンス料金を請求します。ライセンス料を支払った企業は、商品の包装にグリーン・ドットを印刷し、販売することが認められます。



このマークのついている商品を購入した消費者は、それをまとめて袋やコンテナに捨てれば、後は DSD 社が回収し、分別し、リサイクルします。ですから消費者は品目ごとに細かく分別する必要がありません。

このライセンス方式には大きな利点があります。リサイクルしにくい素材で包装したり、過剰包装したりすれば、包装容器の製造コストの他に、高額なライセンス料を請求されるのです。それは商品の価格に跳ね返ることになります。つまり企

業は、市場経済原理によって、商品のコスト競争を行う際に、プラスチックではなく紙で、あるいは工夫を凝らした簡易な包装をするようになりました。また使い捨ての缶やペットではなく、何度も使えるリユースの飲料容器も増えました。購入時に保証金を支払うリユース容器には、もちろん DSD 社のライセンス料が発生しないからです。これが一般ゴミの容量を数年間で四〇%以上減らした原動力となっています。現在のドイツのスーパーでは各種工夫を凝らした簡易包装が定着しています。

ところで日本の多くの自治体で推奨されているように分別時に個別に資源ゴミを綺麗に洗うことは、実は環境のためによくないことだと知っていますか？ ドイツでは資源ゴミとなる包装容器は空であることが条件ですが、洗浄するのはよくないとされています。リサイクルする段階で、どちらにせよ一括して洗浄することになるからです。

各家庭で別々に洗浄し、工場ではリサイクルの前処理にさらに洗浄といった二重の洗浄により大量の汚水が発生し、エネルギーも消費されます。結局、リサイクルする意味がなかったという例も多々出てくることでしょう。

先週、日本の容り法の三者痛み分け原理の敗者は誰かと尋ねました。リサイクル費用を表立って価格に上乗せできない企業や、新たな負担のできた自治体も敗者でしょうが、分別という面倒な労働を強いられる市民も大きな敗者です。しかしゴミが減らず、効率的なリサイクルがなされていない現状は、環境に一番の負担を与えたのではないのでしょうか。三者で負担の痛み分けをした結果、四者が全滅してしまったというのが私の目から見る日本の制度です。

第一六回

今回はドイツのゴミの出し方について。分別はいたって簡単で、紙類、ビン・ガラス、包装容器、コンポスト用の緑のゴミ、そして残りのゴミの五種類です。私の娘は小学校二年生のときに分別が完璧にできるようになりました。収集日に家の前にゴミ容器を置いておくと、収集車が回ってきて空にしてくれるのも手軽で、カラスや猫などがゴミを散らかす心配もありません。

また各自治体にはリサイクルセンターが設けられているのも特徴です。リサイクルやリユースできる家電や家具、衣類などはセンターに持ち込み、使えるものは希望者に抽選で分けられます。ですからドイツで一人暮らしを始める場合は、リサイクルセンターで家具などはほとんど無料で揃ってしまいます。危険物や分別が分からないものもセンターに持ち込めば、係員の指導の下で気軽に無料で処理できます。

日本でのゴミ分別は可燃ゴミと不燃ゴミが基本です。しかしドイツにはそのような考えがありません。リサイクル、あるいはリユースできる資源ゴミと、残りのゴミという分別があるだけです。ちなみにフライブルク市民は昨年度、一人当たり一三二キロのゴミを埋め立て処分しています。この排出量は年々低下を続けています。またドイツの埋め立てゴミには、ほぼ完全に包装容器は混入していないので、日本と比較してゴミの容量がずいぶん押さえられています。包装ゴミは、家庭ごみの約二割程度の重量で、六割もの容積を占めているからです。

もう一つ大きな違いがあります。ドイツのゴミ処理は、各自治体が設立している独立採算制のゴミ事業部が行っています。従ってゴミの処理費用には税金が投入されていません。ゴミを捨てる量

に応じた料金制度によりゴミ処理が運営されます。この制度の利点は、ゴミを捨てる量によってゴミ料金が異なるので、分別を徹底したり、ゴミの出ない生活を心がけたりする人には、経済的な恩恵が与えられます。また分別はお上からの強制でないのも特徴です。分別をしたくない人、できない人は、ゴミ料金を多く支払えば（非常に高くなりますが）、全てのゴミを残りのゴミとして捨ててもお咎めがありません。これは、ドイツで不法投棄が少ない理由の一つでしょう。



分別にうるさい名古屋市に住む友人が、ゴミについてぼやいていました。「分別の種類が多すぎて何をどこに捨ててよいのか分からず、インターネットで検索しなくてはならない」というのです。また「収集所には当番が朝早くから見張りをしているので、時間がなくて徹底した分別ができなかったときには夜中にこっそりゴミを出すしかない」といっています。市民が無償でゴミ当番を引き受けさせられている日本。強制労働にしか私の目には映りません。

住みにくい世の中を作るのが環境保護ではありません。経済的なインセンティブによって環境保護を誘導する仕組み作りが必要とされるのです。

第十七回

昔々のことです。古代ギリシアの哲学者、アリストテレスは『豊かさの本質とは所有することよりも、利用することをいう』と言いました。また『多くの人が共有するものには注意が払われな。なぜならば、人は他人と共有するものよりも、自分の所有するものの方により大きな関心を寄せるからだ』とも言っています。これって環境保護の本質ですよ。

さて、それから二三〇〇年ほど経過した現代。私達は、どちらかという利用することではなく、所有することが豊かさだと思っているようです。この思い違いが、今いわれている環境破壊の大きな原因となっています。時速一〇〇キロが法定最高速度の車社会で、一〇〇馬力を超える乗用車などは利用するためではなく、まさに所有するためのものといえるでしょう。そういった車を所有することで私達の生活は本当に豊かになったのでしょうか？ 「身の回りを手入れする」という意味の環境保護を行う場合、何が私達の生活を豊かにするのかを考えなければなりません。

さて今回は、ヨーロッパで普及が進められている豊かさの一例です。それはカーシェアリングと呼ばれる制度で、フライブルク市でも一九九一年から取り組みがはじまっています。



カーシェアリングとは一体何でしょうか？

一口でいえば「車を所有するのではなく、車の性能を利用するシステム」となります。平均的なマイカーは、たった二・八%の時間しか利用されず、ほとんどの時間は車庫で不動車として存在している、というのが先進国の車の実情です。

ですから、ある車が利用されていない時間に他の人が利用するといったアイデアを組織にしたものがカーシェアリングです。フライブルクのカーシェアリング協会では、約二〇〇〇人の会員が約一〇〇台の自動車を共有しています。

車の利用方法は簡単で、会員は車を利用したい日時と希望の車種を管理センターに電話連絡します。市内でちょっとした買い物をするための小型車から、旅行用に荷物を積めるRV、九人乗りのバンまで一〇〇台の車から好きな車を選べます。そして車の置かれている最寄りの駐車場に行き、会員が所有している鍵を使って車を利用します。料金は利用時間と走行距離から割り出され、月末に支払います。年間走行距離が一万キロに満たないケースでは、カーシェアリング料金は、マイカーを所有し、使用するよりも経済的になるよう設定されています。

マイカーを持つと車で移動する必要がない距離でも、ついつい車を使ってしまうものです。その点、時と場合によって徒歩や自転車、バスやタクシー、そして車を選択するカーシェアリングは、非常に環境にやさしいシステムで、共有車一台で年間約四万キロの車の走行距離が抑制されると研究から分かっています。

「使った分だけお金を払い、時と場合に合わせて車種を選択する」という画期的な制度は、我慢を強要することなく環境保護ができてしまうこれからの社会システムです。

第一八回

今年の夏、ヨーロッパは灼熱と干ばつに見舞われました。フランスをはじめドイツでも熱中症による死者が多発する一方で、農作物の収穫にも大きく影響しています。また河川や湖沼の水不足が生態系にも大きなダメージを与えています。森も被害を受けました。一説では、今年の夏の渇水分を回復するには三年の多雨な年を必要とするそうです。森の回復には数十年必要とする旨の研究も報告されています。昨年の夏に大きな被害をもたらしたヨーロッパの大洪水が嘘のように思えます。



それにひきかえ今年の日本は梅雨明けが遅れ、冷夏で長雨が続き、いくつかの大型の台風が発生しています。アメリカでも超大型のハリケーンがワシントンを襲ったのはつい最近のことです。昨年名古屋での集中豪雨、中国での大洪水など世界のどこかで大きな自然災害が発生しています。それもこれも地球温暖化の影響なのでしょうか。

こういった自然災害が発生すると被害総額というものが計算されます。ミュンヘンにあるヨーロッパ最大手の再保険会社は、その被害総額について興味深い数字を公表しています。

『自然災害による被害額が一九八〇年以降の傾向で増え続け、——これからの世界の経済成長率を仮に平均3%で予測するとすれば、——二〇六〇年には気候変動によって引き起こされる自然災害の総被害額が、世界全体の国内総生産

(GDP)の合計を超えることになる』というものです。恐ろしくはありませんか？

国内総生産よりも自然災害による被害額のほうが大きくなる社会を想像してみてください。私達人類が作り出すものよりも、自然が破壊するものの方が大きくなる社会です。私が翻訳した本の著者は、「自然に対する第三次世界大戦」はもうすではじまっていると記していますが、これ以上に現在の状況を表すのに適している言葉はないのかもしれませんが、この先数十年で、あるいは数年後にいくつかの国は自然災害が原因で破綻する、そんな不安も広がっています。

一九九二年にリオデジャネイロで気候保護や環境保護をテーマにしたはじめての世界会議が開かれました。そしてその悪しき状況を改善するために京都で議定書が作られています。しかしその後も、世界の化石燃料使用量と温室効果ガス、二酸化炭素の排出量は伸び続けています。私たちの乗り込んでいる宇宙船「地球号」は大丈夫でしょうか？

最近、といっても八〇年代頃からでしょうか、フライブルク市では「世界規模の環境破壊に歯止めをかける」といった大げさな意図ではなく、「自分の健康を守る」ために自転車が活用されています。最近の世界的な禁煙、健康志向のブームともあいまって、通勤を自転車で、あるいは週末を自転車で楽しむ人びとが増え続けています。日本では自転車は道路上での厄介者と成り下がっているようです。来週はフライブルクの自転車ライフについてレポートしましょう。

第一九回

今回は自転車の話。フライブルク市の自転車ライフを快適にしているのが、よく整備された自転車道と駐輪場です。自転車は、車や歩行者とは異なる速度で通行しますから専用の自転車道が当然必要になります。これが整備されないと、自転車は歩行者や車にとって危険で厄介者になるのです。

日本で車を運転している人は、車の中で自転車に向かって「アホ」「危ない!」とつぶやいた経験があるのではないのでしょうか。これは自転車や車を運転している「人」が悪いのではなく、自転車を取り巻く「環境」が悪いのです。フライブルク市の場合、一九七〇年にはじめて設置された延長二九キロの自転車レーンは、現在では総延長四〇〇キロにまで伸びています。これが快適な自転車ライフの秘訣です。



また自転車置き場も重要なポイントです。フライブルクの市内中心部には、分散された形で六千台分の自転車置き場が輪留め付きで整備されているので、買い物のときには自転車を気軽に止めることができます。また日本でよく問題になっている駅の違法駐輪も、「安価ではあるが有料」という形で問題を緩和することができます。フライブルク駅に接続した形で設置された「自転車ステ

ーション」には、二四時間警備の千台分の有料駐輪場があります。自転車ステーションなるアイデアは、自転車先進国のオランダからの輸入です。単なる駐輪場ではない「ステーション」には、自転車の修理を任せられる自転車店や、レンタサイクル、以前に紹介したカーシェアリングの本部、旅行代理店、公共交通の切符を購入できる「みどりの窓口」などが置かれています。また自転車好きが集まる喫茶店も人気の場所です。

こういった駐輪場と自転車道の整備は、市の発展に対しても非常に重要です。なぜなら車交通だけを助成する自治体の場合、市の中心部がさびれ、ドーナツ化現状が見られるようになるからです。郊外の大型店や駐車場のある飲食店だけが生き延び、いくら市内中心部に有料の駐車場を作ったところで商店街を利用する人は減り続けます。

少し前まで日本の多くの地方自治体で「街へ行く」と言えば市街の中心地や商店街で買い物することを意味していました。それは徒歩や自転車によって買い物が行われていたからです。

商店街が衰えるとその自治体の顔がなくなり、中心部が衰退します。自転車交通を促進しているドイツの自治体では、中心部の商店街に活気があり、郊外大型店とのバランスが保てています。

また健康や精神衛生の上でも自転車の促進は欠かせません。現代の成人病の多くの原因は食事と運動不足とストレスによるものです。毎日の通勤に自転車を使い、週末は家族でツーリングといった習慣により、今までとは違った職場や生活の質が見出せるのではないのでしょうか。自転車を使って破綻寸前の健康保険改革を行う、といった大胆なアイデアもそのうち認められる世の中になるでしょう。

第二〇回

これまでは、ドイツ・フライブルク市の環境保護について書いてきました。しかし遠いヨーロッパの話を聞いてみたところで「そうはいつでも日本ではなあ」と思われている読者の方も多いのではないのでしょうか。そんな視線を感じながら、次回からは、日本とヨーロッパの暮らしぶりを比較しながら、環境保護をテーマにレポートします。連載のタイトルは、「和と欧の身の回り」です。お楽しみに。

さて「緑の街と緑の人びと」の最終回は、福祉について書いてみます。なぜなら環境保護と社会福祉は切っても切れない関係にあるからです。



これまでのアメリカをはじめとする西側先進国の発展には、一つ的前提が必要でした。それは「パイは大きくなり続ける」というものです。しかし九〇年代にその認識が間違っていたことが明らかになっています。地球というパイはこれ以上大きくなりません。これはゆるぎない真実ですから、「経済成長のために死力を尽くします」といったタイプの政治家には注意が必要です。パイがこれ以上大きくならない以上、私達はそのパイを不公平なく上手に分けることを考えなければならない時代へと突入しています。

つまり成長ではなく成熟に向けて、私達の社会

や生活を変えてゆく必要があるのです。そこで身の回りを守るという意味の環境保護と同時に、公平にパイを分けるための社会福祉が暮らしを豊かにするために必要です。

ドイツの社会福祉について少し書きましょう。日本では「働かざるもの食うべからず」といわれ続けています。ドイツでもいろいろな議論はありますが、「この人はなぜ働けないのか」という本質を考えることができる成熟した人が大勢います。アルコールや麻薬中毒、あるいはギャンブル中毒になるのにも原因があるはずですが。「臭いものには蓋」といった問題ある人びとを排除するやり方ではなく、そこに至る原因を突き詰めて排除する、つまり「罪を憎んで人を憎まず」というドイツの社会福祉を巡る議論には、日本人の私はただただ脱帽しています。

これからの日本は否応なく超高齢化社会に突入します。まもなく団塊の世代の人びとがまとめて定年しますから、今のままでは健康保険や年金制度が破綻することは目に見えています。しかし金がないからといって誰かを見殺しにする「姥捨て山」方式しか手はないのでしょうか。

日本でワールドカップが行われたときのことでした。ドイツの新聞には、サッカー場の芝でホームレスを隠してしまうといった劇画が掲載されました。中国や日本をなどアジアの国々は、自国の醜いものを世界に見られたくないという「臭いものには蓋」の原理が未だに濃厚なようです。

私は人びとの意識や暮らしが成熟すれば、多くの問題は緩和されると思っています。タイトルの「緑の人びと」とは金銭面だけではない豊かな暮らしの人びとのことを指します。こんな時勢だからこそ日本にも「緑の人びと」が必要とされているのではないのでしょうか。